

Title	<教室通信>学科長退任にあたって
Author(s)	北野, 正雄
Citation	Cue : 京都大学電気関係教室技術情報誌 (2011), 25: 59-59
Issue Date	2011-03
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145915
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

教室通信

学科長退任にあたって

電気電子工学科長 北 野 正 雄

本年3月で電気電子工学科長としての役目を終えることになりましたので、2年間の任期中にお寄せいただきました数多くのご協力へのお礼と現況のご報告を兼ねて教室通信に寄稿させていただきます。

前任の佐藤亨教授には初代の公選制学科長として3年にわたり、学科の新しい体制づくりにご尽力いただきました。2代目としましては、路線を伸延する方向でスムーズに仕事をさせていただくことができました。

高校との連携に関しては、出前授業、生徒の研究室への受入れ、高校教員の研修など、高校における理科教育や体験型授業を支援する活動が徐々にではありますが拡充されてきました。本誌cueに連載の「高校生のページ」の抜き刷り特集号は多くの高校生に配布されています。また、受験生向きのWEBページも拡充されています。これらの連携活動は受験生の囲い込みという短期的視点ではなく、中等教育における理系の教育環境の改善に少しでも貢献できればとの思いで行われています。

最近、本格的な改訂が行われた学部のカリキュラムも今年は3回生までの進行することになり、完成形に近づいています。科目間の関係を表す精細な系統樹も新たに描かれ、学生指導に活用されています。また改革が予定されている全学共通科目（教養科目）との接続の調整や、桂移転時の本格改訂以来、8年が経過している学生実験の見直しなどが今後の課題となっています。

共通的課題としては、大学生活に適應できない学生が増えていることへの対策として初年次教育の必要性が認識されており、その内容や実施方法を検討してゆく必要があります。また、産業界からはキャリア教育の拡充や国際化対応（英語の訓練）が要請されています。さらには、半期15週の講義時間の確保という国の指導に従うべく、窮屈なアカデミックカレンダーの導入が予定されており、休業期間の大幅な短縮に伴う課外活動や入学試験などへの影響が懸念されています。このような外部からの要請については、その教育的意義や効果を的確に判断し、対応を考えてゆく必要があると思われます。

昨年秋には新たな試みとして、洛友会の主催で「先輩と学生との交流会」を開催していただきました。外形的には合同企業説明会に酷似していますが、趣旨としては、現役の学生と企業で活躍中のOB諸氏との交流の場を設定することで、電気電子工学と社会の関わりを身近に感じてもらい、勉学、研究への意欲を高めることを目指しています。

エレクトロニクス・サマーキャンプは回を重ね3年目になりました。昨年は、ペットボトル分別ロボット(1回生)、1チップマイコンによる電子楽器(2回生)、飛行船のラジコン制御(3回生)という課題が設定され、約60名の学生が最終日のコンテストに向けた熱い3日間を体験しました。

大学院では博士課程への進学率の低下が問題となっていましたが、修士博士一貫コース、副指導制、GCOEによる経済的支援、海外派遣、研究室横断セミナーなどのさまざまな取り組みが効を奏し、改善が見られています。これらの取り組みは他専攻や他大学の電気系専攻から注目されています。ただし、GCOEは2011年度で終了を迎えるため、経済支援の財源確保が課題となっています。一方、教員、学生の意識改革が進み、博士課程や若手研究者を前面に据えた活発な研究の場の醸成につながったことが何よりの成果であったと感じています。

話は変わりますが、最近、吉田の電気総合館に隣接する旧変電所建物が、全学の研究施設として全面改修されることになりました。工事期間中、騒音を避けるために電気総合館の講義室は使用を中止し、代替教室で講義を行いました。しかし、学生からは早く電気総合館に戻って欲しいという希望が続出しました。40年以上も前に建設された講義室ですが、学科の教育環境として見事に機能してきたことを再認識した次第です。

再任によりもう一年学科長を勤めさせていただくことも制度的に許されておりましたが、工学研究科や全学関係の業務との重複で十分職務を果たせない場面もあり、勝手ながら2年で退任させていただくことになりました。新年度からは、小野寺秀俊教授が新学科長に就任されます。皆様には、引き続き電気電子工学科に対し、温かいご支援とご教示をお願いいたします。